

# 空想傾向がテストと関連のない思考に与える影響

○平田 久子・岩永 誠（非会員）  
（広島大学大学院総合科学研究科）

Key Word : 空想傾向, テスト不安, 社会的適応

## 問題と目的

学校における定期考査や入学試験など、人から評価を受ける場面に直面した時、集中して頑張らなければと思う一方、もし上手くいかなかったらどうしようかと思ひ、試験を受けるのを止めたくなったり、課題に集中できなくなったりすることがある。

テストで良い成績を取るのに必要な反応を妨害する不適切な反応を Mandler & Sarason (1952) はテスト不安と定義し、Sarason (1984) は、緊張 (Tension)、懸念 (Worry)、テストと無関係な思考 (Test-Irrelevant Thinking)、身体反応 (Bodily Reaction) の 4 つの要素に分けた。課題への集中を干渉する自己没頭は認知的干渉 (Cognitive interference) と呼ばれ (Sarason & Stoops, 1978)、個人特性の影響によっても生じる。

現前の現実世界とは別の虚構世界を表象する精神活動を空想 (木下, 1999) といい、Wilson & Barber (1981) は空想への深い没頭に特徴づけられたパーソナリティ特性を空想傾向 (fantasy proneness) と名付けた。空想傾向には、病理性をもたらすネガティブな働きと生産的で創造的な体験をもたらすポジティブな働きがある (松岡, 2010) ことが指摘されている。

Singer (1975) は空想の認知技能説を唱え、Person (1995) は空想には感情を調節する役割があると述べていることから、直面していることやこれから起こることに不安や緊張を覚えたとき、対処場面とは違う場면을イメージすることで、不安や緊張を軽減しているものと考えられる。松井 (2004) は、ネガティブな反すう傾向を媒介して空想傾向がうつに影響を与えていることを報告している。岡田・松岡 (2005) は、空想傾向が情緒不安定性と結びつかない場合には、空想傾向の強さはその人の生活のウェルビーイングを増大させる効果を持つと述べている。ポジティブ・ネガティブどちらの働きをするかは性

格特性、空想体験の統御可能性や対処方法によって異なり、空想傾向そのものが精神的健康に悪影響を与えているわけではなく、空想は適応的側面を持っていると考えられる。

だが、テストで良い成績を取るといった社会的課題を与えられた時に、その課題から逃避したり、意図的・無意図的にかかわらず、目の前の課題から注意が逸れてしまったりと、認知的干渉も引き起こしているといえる。社会的にも望ましくなく、必ずしも適応的とはいえないと思われる。

松井・児玉 (2007) は、空想傾向とストレス対処型、主観的健康感の関係を検討し、空想傾向が高くなると、様々なストレス対処型を促進する働きがあり、自己コントロール型、肯定評価型、計画型の 3 つの対処型は主観的健康感により影響を与えていたが、逃避型は全体的幸福感と対処の自信を減少させ、心的動揺を増加させるという、よくない影響を与えていたと報告している。これらのことから、空想傾向は、社会的に望ましくないテストと関連のない思考に何らかのよくない影響を与えていると考えられる。

本研究では、社会的適応を測る尺度としてテストと関連のない思考を用い、空想傾向がテストと関連のない思考に影響を及ぼしているのか、そのとき精神的健康に関わると報告されている情緒不安定性やネガティブな反すう傾向と関わりがあるのかを検討し、空想傾向のネガティブ・ポジティブ効果が社会的適応に及ぼす影響をテストと関連のない思考を用いて、間接的な精神的健康の関与を情緒不安定性とネガティブな反すう傾向を用いて探索することを目的とした。

## 方法

**調査対象者** A 大学と B 大学の大学生 434 名 (男性 199 名, 女性 233 名, 不明 2 名, 平均年齢 19.5 歳 (SD=1.80))。

**手続き** 質問紙を用いた調査を行った。大学での講義の最後に調査用紙を配布し、その場で回答を求め

る、または質問紙を持ち帰らせて回答させた。

**調査内容** 次の尺度について回答を求めた。

(1) 空想傾向：Creative Experience Questionnaire 日本語版(CEQ-J) (岡田・松岡・轟木, 2004) 25 項目のうち 22 項目, 0-5 の 6 件法。(2) 情緒不安定性：性格特性尺度 (和田, 1996) の情緒不安定性の項目 12 項目, 0-5 の 6 件法。(3) ネガティブな反すう：ネガティブな反すう尺度 (伊藤・上里, 2001) 14 項目のうち 11 項目 7 項目, 0-5 の 6 件法。(4) テストと関連のない思考：RTT (Reaction To Test; Sarason, 1984) の日本語版 (三根・三根・浜, 1986) の不適切な考え 10 項目のうち 7 項目, 0-5 の 6 件法。

### 結果と考察

**因子分析** 全ての尺度について主因子法・プロマックス回転で因子分析を行った結果, 空想傾向は、「子どもの頃の体験」「空想の鮮やかさ」「想起力の高さによる体験」因子の 3 因子が抽出された。情緒不安定性は 1 因子が妥当と判断され、「情緒不安定性」因子とした。ネガティブな反すうは「ネガティブな反すう傾向」「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」の 2 因子であった。テストと関連のない思考は 1 因子が妥当と判断され、「不適切な考え」因子とした。各因子の平均を下位尺度得点とし、ネガティブな反すうは「ネガティブな反すう傾向」因子のみ、後の分析に用いることとした。

### 空想傾向がテストと関連のない思考に及ぼす影響と情緒不安定性、ネガティブな反すう傾向

空想傾向がテストと関連のない思考に直接、影響を与えているのか、情緒不安定性やネガティブな反すう傾向といった個人特性を媒介して影響を与えているのかを検討するため、次の 3 つのモデルについて共分散構造分析を行った。

1. 空想傾向が直接、不適切な考えに影響を与えるモデル
2. 1 に空想傾向が情緒不安定性を媒介して不適切な考えに影響を与えるパスを加えたモデル
3. 1 に空想傾向がネガティブな反すう傾向を媒介して不適切な考えに影響を与えるモデル

統計的に有意でないパスを削除した結果、全てのモデルで子どもの頃の体験から不適切な考えに直接有意なパスを引くこと、子どもの頃の体験から情緒不安定性やネガティブな反すう傾向を媒介して不適切な考えに有意なパスを引くこと、想起力の高さによる体験から不適切な考えに直接有意なパスを引く

ことはできなかった (Fig.1, Fig.2, Fig.3)。

適合度指標を、次に示す。

1.  $\chi^2(1)=.117(p=.73)$ , GFI=1.000, AGFI=.999, CFI=1.000, RMSEA=.000, AIC=18.117
2.  $\chi^2(3)=3.883(p=.27)$ , GFI=.996, AGFI=.982, CFI=.997, RMSEA=.026, AIC=27.883
3.  $\chi^2(3)=5.523(p=.14)$ , GFI=.995, AGFI=.975, CFI=.993, RMSEA=.044, AIC=29.523

1 と 2, 1 と 3 をそれぞれ比較し、どちらも 1 のモデルの適合度が高かったので 1 を採択とした。

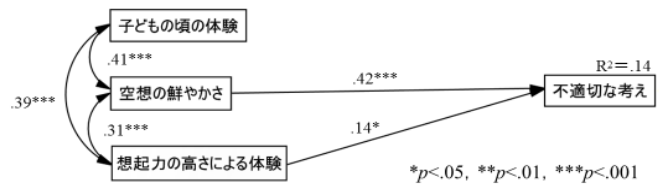


Fig.1 空想傾向と不適切な考えの関係

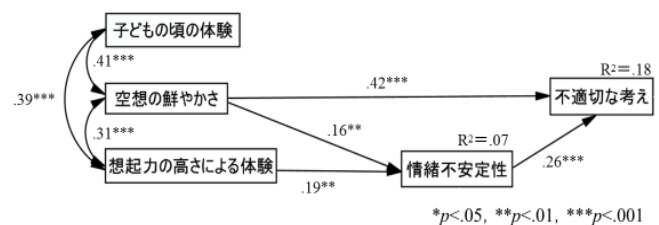


Fig.2 空想傾向と不適切な考えと情緒不安定性の関係

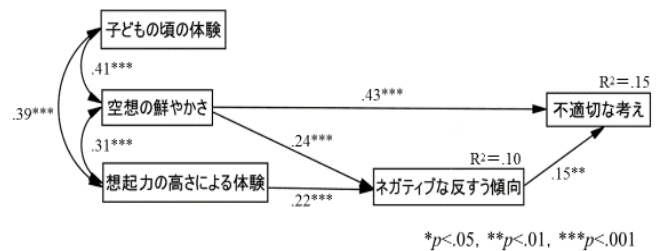


Fig.3 空想傾向と不適切な考えとネガティブな反すう傾向の関係

モデル 1 は、空想の鮮やかさと想起力の高さによる体験から不適切な考えに有意な正のパスが引かれ、子どもの頃の体験からはパスが引かれなかった。

以上より、子どもの頃の体験よりも空想の鮮やかさや想起力の高さによる体験がテストと関連のない思考に直接、影響を与えていることが示された。

空想傾向の特徴であるイメージの鮮明性やイメージ想起力の高さは、時と場合によっては不適切な行動につながるかもしれないと思われる。空想傾向がネガティブ・ポジティブのどちらに働くかを、精神的健康という側面から考えた時は、性格特性、空想体験の統御可能性や対処方法によって左右されるが、テスト不安のように社会的課題を与えられ、人から評価を受けるという場面では、空想傾向そのものが影響を与えているようである。社会的側面において適応的であるかということについては、他の事柄についても検討してみる必要がある。

(HIRATA Hisako, IWANAGA Makoto)